

生徒が望む対応は図17から、反社会的な気持ちを持った生徒には、温かい言葉かけをして人間関係を作っていくことが必要である。その中で規範性を育てていくことも大切である。

非社会的な気持ちを持った生徒には励ますなど、教育相談的な支えが必要である。

また、教師自身の体験を話すことによって生徒の人間性を示すことが、指導援助の一助となる。全体的により深いラポールを形成していくことが解決の前提と考えられる。

③ 教師の立場から

指導援助		対反社会的行動傾向					対非社会的行動傾向				
		10	20	30	40	50(%)	10	20	30	40	50(%)
努力を認めほめる	小	51.6					53.6				
	中	54.3					37.5				
	高	47.0					44.1				
悩み・心配をきき出す	小	49.8					46.4				
	中	41.4					55.6				
	高	44.6					38.2				
話になづききく	小	24.2					30.4				
	中	17.2					29.2				
	高	20.5					20.6				
行動・性格面の改善を促す	小	12.6					21.3				
	中	17.2					23.6				
	高	19.3					32.4				
検査等で性格面に気づかせる	小	13.5					11.6				
	中	11.8					22.2				
	高	19.3					32.4				

図18 必要とされる指導援助

教師が今後、必要と考える指導援助は、図19から、全体的に校種や予想される問題行動が反社会的行動、非社会的行動を問わず、子供の日常生活の中で、受容的な態度や肯定的なかかわりが大切である。更に、本人の問題点の改善解決への直接的なアプローチは人間関係を形成した上で効果的である。そして、自己洞察を考えた上での順序だてを考えた指導援助が必要である。特に非社会的行動が予想される児童生徒に対してはまず、子供の話に傾聴し、子供に対して安心感を与えることが前提といえる。

(4) まとめと考察

① 今後の指導援助

児童生徒は、不安な気持ちを抱き、ともすると反社会的行動や非社会的行動に走りそうになった時、自分のそのような気持ちに気づいてほしいと

願っている。しかし、なかなか気づいてもらえていない現状が図19より分かる。

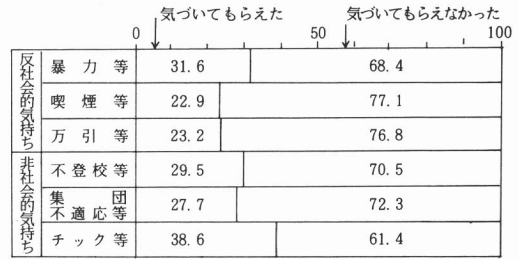


図19 問題行動につながる気持ちへの教師の「気づき」(中・高校生)

そのような中で、不安なつらい気持ちを誰にも理解してもらえない児童生徒は、その気持ちの整理に窮した結果、問題行動に走るということも十分あり得ると考えられる。そのため、常日ごろから子供とのふれ合いの機会を多く持ち、子供の表情や態度などのわずかな変化にも気づく必要がある。

以上のことから、今後の予防的な指導援助の方向性としては次のようなことが考えられる。

ア、子供の心身の発達特性を知るとともに子供個人についての理解を深め、受容的・共感的な姿勢で対応する。

イ、子供のあるがままの姿を受け入れ、その背景を考え、各種の情報に耳を傾け、経験を生かした指導計画を基に対応する。

ウ、本人が集団に受け入れられるよう、思いやりの気持ちのあふれる学級集団作りをしながら、教育相談的な、しかも、分かる授業の展開に努める。

② 考察

予防的な指導援助の要点と基本的な対応を探るために実施した調査は、十分に期待に応えるものであった。つまり、調査の対象を指導援助する側と指導援助される側の両者に実施したことは、要点と基本的な対応をより児童生徒側にたった指導援助の方向から探る上で効果的であった。